

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	感想餘禄（二）
Author(s)	獨尊居士
Citation	龍南會雜誌， 1 0 0： 7 6 - 8 3
Issue date	1903-06-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5682
Right	

感想餘錄 (三)

獨尊居士

○歴史を以て唯過去の記録なりとせば、歴史は單に記憶力の對象となり、從て記憶力の最も豊富なる小學校の生徒は當然大歴史家たるに至る可し。世世斯の如き滑稽のあるべしや。歴史は須らく人類進歩の記録たるべきなり。更に一步を進めて之を論ずれば歴史は正に過去の我を教ふる人類一日も不可欠の學也。從て歴史によりて、我等の生命が過去數千載に伸長せらるゝ事、宛ら宗教が我等の生命を未來永劫に發展せしむるが如し。兩者相待つて始めて茲に完全圓滿なる人生を現するを得。去れば誠に能く日本歴史を解せる者はやがて過去二千六百年を通じて生長し來れる大日本男兒たるなからんや。又眞に世界歴史の大勢に同化せる者はやがて過去數千載の發達を遂げたる世界的人格たるなからんや。歴史と人生との間に存する關係如何に深密ならずや。史眼這箇の理を看破して始めて我等はルイスと共に「吾人末世に出でし者は體軀倭少なり」と雖も猶古人の肩に登りて觀るを得る也。吾人の思想は大ならずと雖も然もソクラテスの肩によりて哲學を觀望するを得る也。左れば吾人の見解はソクラテスよりも大なり」と呼ぶを得べし。以て人世と歴史に貢獻するを得べし、以て時勢を達觀し、一代を指導するの豫言者たるを得べし。これ固よりノートの訂正、事實の暗記以外に歴史の價值を認めざる學究士の與り知る所にあらず。

○所謂五事の御誓文一度び煥發されて、開國進取の國是確立するや、茲に西洋文明の大潮流は澎湃滔々、我花彩列島の岸に波打ちて其綠兒「新日本」を襲ひぬ。我國の精神界が波瀾多く、頓挫烈しく、

摩曉曉其地、殆んと其過語する所を知らざる者誠と偶然にあらざる也。此時に當りては、誰か能く日本歴史をして西洋歴史に連結せしめ、東洋文明として西洋文明と握手せしめ、日本魂を以て基督魂に接觸せしめ、新武士道新日本魂を標榜して、茲に一國の民心を歸り啓導し、更に進んで新世界歴史、新世界文明を起す大豫言者大先覺者たる者ぞ。此人出づるにあらざるは、新日本の健全なる生立は遂に期す可らず。此人顯はるゝにあらざるは、新日本の世界的膨脹は遂に望む可らず。○而して吾人は斯種の豫言者先覺者を先づ宗教界に求めんと欲する者也。蓋し活宗教が一國精神の基礎、世界文明の根底をなす者なる事は、史上の大事實として、略々掩ふ可らず。「新日本の勃興」は深き深き宗教的精神に根ざす者。由來明治維新の活劇は、單なる政治的改進黨であらずして、其眞髓は寧ろ平田、本居乃至黒住の如き國學者、神道家によりて起りたる神道の復興大發展といふを以て當れどもなす。其政治的改進黨は畢竟幕王の原理と敬神の大義に見出したるの結果に外ならず。之を西洋歴史に徴するに、新教の勃興は直ちに國家の勃興、文明の進歩、其物なりしを見る。北米合衆國が今日之の如く隆々たる霸氣を抱いて世界に雄飛活動する所以も、もと是れ彼等の祖先たる數百の清教徒の一團が遠く大西洋を横ぎりて新世界を開拓せんと試み、先づ其處に教會を樹立して神を拜むる宗教的信念の發揮に外ならざるを知らずや。サウサセンの勃興には言ふ迄もなく、フリントの大帝の功多きに居らん。然も彼が佛國より逃亡したる新教徒に待つ事の如何に多大なりしを知らずや。此他英國の隆旺、和蘭の獨立、皆新教の勃興に伴はざるはなし。所詮太傑ナルチネルが紀元千五百十七年、九十五條條不條理を數へて羅馬法王に對して舉げたる反抗の聲は、正に其の燦爛たる

近世文明を生み堂々たる歐米諸列強國を立たしめたるの氣魄と内容と權威とを彼れ宗教改革の
目を衝て爆發し、茲に新天地を開拓して現代の文明世界を作り出したる者といふ可き也。更に湖
て猶太國がメソポタミヤ湖畔に咲びたる神人イエスキリストに見よ。彼の感化と勢力とが如何に世界人文
の發展に影響する事の多きよ。宛然世界文明の中心核子は彼れ基督なるが如し。大なる哉、宗教的
天才が國運の隆旺と文明の進歩に貢獻する事や。吾人が豫言者と先づ宗教界に求むる所以實に此に
存す矣。

○吾人の觀る所を以てすれば、文學博士井上哲次郎氏の如きは夙に世界歴史の大勢趨向に鑑み、日
本民族の天職を以て西洋文明と東洋文明との握手にありとなし、佛教と基督教とを打て一丸となし、
所謂倫理的宗教によりて以て帝國の精神的生命を確立し、進んで世界萬民を擧げて信奉すべき理想
的宗教を開かんとするの豫言者にあらざるなきか。誰か博士の著「倫理と宗教との關係」を讀んで其
識見の雄大、論議の明快、着想の進歩的なるに首肯し感嘆せざるものぞ。誠にコレ世界の宗教文壇
に於ける古今獨歩の大氣燭といふも必しも溢美にあらす。

○博士は歴史の宗教を呪咀せり。佛教基督教共に將來宗教たるの資格なきを痛論せり。神經過敏
なる獨斷的宗教家之を見て周章狼敗、直ちに博士を目して宗教を賊する者となす。何等の妄斷速了
ぞや。博士の非難は未だ皆、佛教乃至基督教の根本的原理に及びたる事なし。所謂理想教の内容は
やがて佛教乃至基督教の内に發展した宗教的真理其物を措て他に求む可らずといふにあらまや。
想ひ見よ、佛教は決して釋迦の創唱に係る者にあらす。釋迦以前既に婆羅門教の内に潜ひし宗教的

眞理が唯だ天才釋迦の如き人格によりて燦然たる一大光明を放ちて千古の偉觀を呈せる者には外な
ず。基督教に於ても亦然り。彼れ基督は古猶太豫言者詩人の意識を通じて流れ流れし宗教的潮流の
湛へて森々たる海となりし者、未だ嘗て新宗教を創めたる者にあらず。然らば則ち眞に婆羅門教
の眞髓を悟了し、猶太教の眞義に徹底せる者はやがて佛教基督教以前の佛教徒基督教徒にあらず
無き乎。博士の論議を恐れて之を賊視する者は其理想教の信徒たり得ざるは勿論、釋迦を迫害し基
督を磔刑に處したる頑迷固陋なる婆羅門教猶太教の徒と一般、或は未だ眞の佛教若くは基督教の徒
にあらずらん事を恐る。

○トルストイが教務院に送りし答辯書に曰く「ゴルリツヂの言に初め基督教を景慕する事眞理に
甚しき者は須臾にして基督教を忘れて教會又は宗派に偏すべく、果ては一切を捨てて己が安靜を
乞ふに至るべしと云るあるも、我は之と反對に初め正統教會を景慕する己が安靜の此にあらざりしが
幾くもなく教會を離れて基督教を愛し今は一切を捨て、眞理を愛す。爾來我理想する基督教は眞理
に適合す云々」と。吾人の立脚地亦此れのみ。吾人は基督教を信するよりも先づ眞理を信するを以て。
基督教は於て眞理を認むるが故に基督教を信す也。此意味に於て吾人は基督教徒たるも同時に
佛教徒たり、又理想教徒なり。

○井上博士の識見雄大はあり、着想進歩的なるはあり、氣焰天を焦すの慨はあり。然れ共博士は僅
くまで學者にして宗教的天才にあらずるこそ是非なけれ。所謂理想教は論理として殆ど一語の非難
す可き餘地を有せずと雖も、要するは唯哲學者の冷靜なる頭腦に存する將來の宗教觀のみを考へ以

て人格に體現して天下萬世を動かすの生命活力とならば、由來思想は如何に幽玄深邃雄大を極むるも思想其物に於ては生命なし、活力なし。此の博士の宗教論が動もすれば唯單に机上の空論に終り、未だ以て帝國の新生命とならず、世界新文明の動機たらざる所以なり。世の輕浮時流を追ふの徒這般の消息を解せず、妄りに博士の口吻を學んで成立宗教の打破を叫ぶ。思ふに世の善男善女の敬虔誠實なる信仰追念を轉復して五里霧中に彷徨せしむる者は斯かる輕舉盲動にあらざるなきか。固より成立宗教の打破必しも愚からず、又社會の進歩人文の發展は誠に理想の宗教を要求すべし。されば是は唯ルーテル、基督乃至耶穌の如き大人格にして知つて之を主張實現するを待べきのみ。

○一高の秀才藤村操氏人生問題に煩悶し懊惱したるの結果、可惜青春多望の身を懷いて、斷然決意身を華嚴の懸泉に投げて死す。何たる悲劇ぞや。高襟、輕薄、無主義、沒見識の學生滔々として天下に溢るゝの時、嶄然として斯の如き骨頭ある快男兒を見る事誠に意を強うする者のなくんばあらす。醉生夢死の徒は言ふ迄もなく、字書とノート以外に人生を知らざる學究子も共に好少年藤村氏の犠牲によりて須らく警醒一番、寔に慚死すべし。

○人生は遊戲にあらず。飽くまで眞面目ならざる可らず。無意義の生は寧ろ死するの優れるに如からんか。さはれ深く心すべきは生の既に遊戲にあらざるが如く死も亦決して決して遊戲にあらざる事也。吾人は藤村氏の苦悶苦闘に滿腔の同情を寄すると同時に、痛く其死を決したるの愚を憫まさんばあらず、彼れももろもろ巖頭の大樹に何と書せるぞ。曰く「悠々たる哉天壤。遼々たる哉古今。五尺の小軀を以て此大をばからんとす。ホレシヨの哲學竟に何等のオーラを發する者ぞ、真

有の真相は唯一言にして悉す。曰く不可解。我れ此恨を懷いて煩悶終に死を決す。既に巖頭に立の
に及んで胸中何等の不安あるなし云々」言誠に悲壯切實を極む。然り、然れども哲學を以て宇宙
人生の眞義を闡明せんとしたるは何等の短慮淺見ぞや。而して此れ嘗に藤村氏に於てのみならず、
世上多くの宗教未信者若くは懷疑者が期せずして暗合一致する誤謬なるが如し。

○由來、趣味價值乃至意義なる者は知らるべき者にあらずして寧ろ感ぜらるべき者、認識せらるべ
き者にあらずして寧ろ直觀せらるべき者。換言すれば知識の對象にあらずして寧ろ感情の對象也。
所詮知識には一定の限度あり、其對象は未だ嘗て實在を捕捉する事あらず。人生宇宙の現象は固
り知識の刀を揮つて之を解決するを得ん。然れ共人生其者に至りては實在なり、最早知識の容喙す
べき範圍にあらず。誠にこれ平凡火を觀るが如く瞭々たる道理なれども、人其平凡なるの故を以て
却て其内に含まれたる絶大の眞理を閑却す、人生の意義を究むるに哲學を以てし、科學を以し、理
論を以てし、所謂不可解の結論に到達して其極人生を呪詛し天地を悲觀し遂に苦悶苦闘死を決する
に至る者即ち此徒。

○世に神を知らざるが故に宗教を信せずといふ者あり。何ぞ宗教を解するの皮相なる。神を知る事
は寧ろ神學若くは哲學の問題に係り宗教の興り知る所にあらず。宗教の神はあたかも音樂の如く、
生命の如く寧ろ感ぜらる可き者、味はる可き者たり。吾人は必しも先づ神の客觀性を究めず。寧
ろ衷心勃々たる向上心の動いて炎々たるインスピレーションの燃ゆる所、大我の聖座、理想の祭壇
に於て我を結ける神を直感直觀する者也。人或は斯の如き神を以て唯主觀の所産若くは理想の空影

に過ぎずと云はん。或は然るべし、然も直に以て斯の如き神は空想迷信なりと斷ずる能はず。由來吾人が理想に向つて渴仰憧憬するは單に主觀の遊戲三昧の沙汰にあらず。さながら鹿が溪水を慕ふ如く、人が飢ゐてパンを求むる如く所謂やむにやまれぬ赤心の要求による者。固より理想其物は直に神其物にあらざるべしと雖も少くも吾人の赤心を衝動して理想を追はざるを得ざらしむる或者は豈ッレ迷妄ならんや。誰かコゝに空想以上の客觀的權威を非認する者ぞ。我が活ける神とは即ち此れのみ矣。所詮宗教は理想の憧憬なり、向上心の高調なり、大我の活動なり。

○歴史を以て過去の「我」となさん者は傳記を以て客觀の「我」となすに於て異議ある可らず。東西古今、幾多の英雄豪傑が演じたる大觀偉業皆此れ「我」の客觀的顯現のみ。少くも「大我」若くは「真我」の客觀的顯現也。大聖英傑の傳を繙いて「我」其物の躍如たるを認むるに至らずんば未だ眞に大聖英傑の本領を學得せるものにあらず、我れ此点に於てコンコードの聖者が言に無上の眞理あるを感ぜ。曰く「歴史及び傳記が人世に貴重なる所以は其能く吾人をして人間が如何なる事業を成し得べきやを知らしめ、之に依て以て自信の念を増加せしむるに在り。プラトン、セクスピア、ミルトンは則ち爭ふ可らざる三大事實也。彼既に之を能くしたり、我れ獨り能くせざるの理あらんや」と。

○「我」の自覺確立して始めて主義定見生じ、希望意氣湧く。科學といひ、哲學といひ、倫理といひ又宗教といふ者皆其究極の根據を「我」に置く事疑ふ可くもあらず。經書も、佛典も、バイブルも絶對的に人生を指導するの力を有する者にあらず。所詮「我」を離れて權威なし、眞理なし、道なし、佛なし、神なし。「我」を離れて存する眞理、ろは人生と何のか、はりもなき空理のみ。「我」を離

れて存する神、それは人生と何のゆかりもなき偶像のみ、聖書が教ふる如く道は近く我目にあり、我心にあり。深く「我」の立脚地を穿てよ、神知靈覺泉の如く湧かん。神興靈感油然として起らん。我獨尊主義の妙趣實に茲に在す。

“Better to reign in Hell than serve in Heaven.”

天の奴僕たらんよりは寧ろ奈落の王たらんのみ（ミルトン）

關門海峽を渡る

木 南 生

雜誌部諸賢百號紀念として文を徴せらる。東都黄塵萬丈の裡にあり考課匆忙の際に當り、竊に龍南にありて松濤を聞き、五合灘の青草を蹈んで天下の英雄を罵倒せし昔日を懷へば、聊か諸賢の意に答ふる所なむるべからず。されども黄塵老ひ易く今や血氣空しく去つて只髮の白からざるを幸とするのみ。文を作る豈に易からんや、即ち舊稿を以て其責を塞く諒焉。

某月某日の夕、僕は山陽の門司棧橋に立つた。日は六連島のあなたに落ちて、黄金色の光嶋のふちを染め海も亦一面に其の色を薰して居る。水上警察の蒸氣にや、其處彼處と走り廻つて黄金色の波に深紅色の波を湧してゐる。金帆四五島のあなたから夕風を孕んで港に入り、款乃の聲、石炭仲士の聲とは夕の聲をなし暮て行く日を送つてゐる。

蒼々茫々たる一種の色は全く一面になびき渡り、煤煙低う蛇のやうに海面近くなびき、物は物々